

---

# Velcelck ~ベルセルク~

三佐 京

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Velcclck 〜ベルセルク〜

### 【Nコード】

N6633Y

### 【作者名】

三佐 京

### 【あらすじ】

異形の者がほとんどの人に認知されていない世界。

少年は異形を殺し、消し、最強の傭兵とうたわれ、非道な殺し屋だとさげすまれ、ただそれだけに生きていた。

ある出来事に巻き込まれ、少年は深い傷をおい、まったく異なる世界へと飛ばされる。

そこは、異業がすべての人に備わった世界。

そこで出会った少女に救われる。

今まで殺してきた者だけの世界で困惑しながら、その出来事を思い

出としては悩み、少女とともに生きる道を選ぶ。

それは、少女の従者であり、使い魔となること。

少年が見いだす答えとは？ 異世界パラレルファンタジー。

## プロローグ（前書き）

初めての投稿です。

まあ、生暖かい目で読んでいただければ幸いです。

## プロローグ

彼が対峙するのは異の者。

「た、たすけてくれ！」

黒いフードに身を包んだ少年に、中年のスーツ姿の男が命を乞う。

それは意味をなさない。

乾いた銃声が響く。

そして訪れる静寂。男の頭上を掠めた銃弾が、青年の意志を隠さずに伝える。

「く、くるなっ！」

相変わらず少年は無表情で口すらも動かさず気配はなく、徐々に間合いを詰める。

彼はすでに決めている。

彼はすでに覚悟している。

彼はすでに……区別している。

「う、うわああー」

青年と対峙していた男が視界から一瞬にして消える。

その男は人であり、人ではない。魔法や魔術、超能力や異能といった力を有していた。そして、いまその力が恐怖によって暴走したのだ。

それは非常に危険なもの。それは完全に人ではなくなることに等しい。同じ異形の者でも恐れるほどのものだ。それはまさに導火線に火が付いた爆弾に値する。

だが、やはり少年は無表情だった。

少年は歩みを止めず、進み続ける。

少年は分かっている。男はそこからいなくなっただけではなく、そこにいないと認識されているだけだということを……。

いや、実際は見えていた。男を視界に入れた瞬間から……消えたように見える今でも、その姿は見え続けていたのだ。

「な、何なんだよお前っ！」

「……」

感情はなく。ただ、殺意の矛先に銃口の向きを合わせる機械的な行為。

引き金は引かれた。

無が有へと帰る。

赤いそれがただ有へと帰り、人であったすべては地面を抉るように消滅する。

少し遅れていたならば、おそらく青年もろともこの空間そのものが無へとなっていた。

異の者の暴走とは規格外。

男の能力はただの触れたものや自分の姿・・・厳密には認識妨害それが暴走の果てに、認識されるべきものの無への変換となったのだ。

その場に黒いフードを脱ぎ捨てる。

照らし出されたのは、どこか悲しげな瞳、日本人特有の黒い瞳に黒髪はどこか冷淡にも感じる。

不可思議な出来事はこうして幕を閉じる。

そう、少年には憎むべき理由がある。

それは彼の人生を変えるに十分であり、ただそれだけと流されるべきものでもある。

彼もまた異なる部類。

でも、黒いフードを脱ぎ捨てた少年にはついさっき人を殺したとは思えないほどのあどけない姿。

もう一つの顔。

それは日本に籍を置きながら、各国を回り、ありとあらゆる異を異によって消す矛盾を残す中で、人と接する為の顔。

少年はこう呼ばれた。「ベルセルク」と。

矛盾はそれに関わるすべての者に、狂っているのだと思わせ恐怖させた。

ベルセルクとは、英語で狂戦士<sup>パーサーカー</sup>、故に少年にはぴったりだった。

それは、異の形にしても。

青年はもはやその行為そのものにとらわれていた。

だから・・・過ちすらも平然と起こしてしまう。

故に、招かれることが正解とは誰も分からない。

だが、結果的に間違いではなかったと最終的に下す判断は誰にも分からない。そのときに下すべき者だから。

恋に似ている・・・そう思うのはきつと・・・そういうものだから。<sup>5。</sup>



報いと始まり。

報いとは、「因果応報」という言葉の通りなのかもしれない。

目の前に自分がいる。

ドッペルゲンガーと出会ったという意味合い共通するところがある。それは・・・明確に迫る「死」である。

ここは自分の部屋ではない。野外だ。

鏡がおいてあるわけではないし、まあガラスに反射していると言えればわかりやすい。

何処に？

それこそ、死を意味する位置にだ。・・・真上、頭上、空。

ここはイギリスのビルが建ち並ぶ大きな通りだ。そこを普通に歩いていただけなのに、こういった事態になるのはなれていると言えれば、慣れていた。

場所が悪すぎる。

上に見えるのは、自分。

黒い瞳に黒髪の日本人で、わかりやすく肩から提げている鞆には日本語で「清廉潔白なり」が鏡文字で意味不明に見える。

ビルが崩れた。

おそらく、人為的なもの・・・いや、異形だな。

ビルは爆発音はなく、ただスライドするように落ちてくる。

「俺が死ぬ・・・か」

長年の行いが決して許されるべきことではないことは分かっているが、それでも生きたいと思う自分の気持ちは、傲慢なのだと思いが嫌になる。

ただ、落ちてくる壁を待つ。

「\*\*\*\*\*、\*\*っ！」

聞き取れない声が、言葉が、風が体を引っ張る。

後ろに倒される形で飛ばされる。入れ替わりにすれ違うロープ人影は顔は見え、綺麗な虹色の光を身にまとっていた。

分かってしまう。異形だと、異端だと。

だが、もう一つの事実も分かってしまう。

後ろに倒れたはずなのに、地面の感触はなく、まるで穴に落ちるような形で視界が歪んだ。

命を救われた。

その意志があつたかどうかは分からないが、その事実が重く突き刺さり、思考を混乱させるには十分だった。

そして、徐々に意識は遠のき、深い眠りにつく。

目が覚めるとそこは見知らぬ天井。

起き上がるうとしたとき、強い頭痛に見舞われ、今まで寝ていたであろうベットから落ちる。

「うっ」

激しい痛みは数分続き、静かに収まり、逆に頭の中がスッキリする。

ドタドタ。

どこからか人の近づく足音が聞こえ、咄嗟に身を隠す。

とは言っても、殺風景な部屋で隠れるところはなく、ドアの死角となる部分に身を寄せる。

ギギギッとゆっくりと扉が開く。

「嘘っ！ 目が覚めていきなり出て行くなって・・・どんな人間不信

「や

その声は少女のもので、扉から部屋に入ってきた少女は綺麗な長い銀髪を揺らし、とても気品・・・いや、気が強うそうだった。

「たくつ。ほんと、最近の若いやつは恩ってやつを素直に受け取らないのが悪い！ もっと、こう・・・素直に仲を取り持つのが下手」

まるで自分に言い聞かせるかのようにつぶやく少女に罪悪感を覚え、声を掛けていた。

「あ、あの一」

「っ！？」

振り返った少女の顔は、見惚れるほど整っていて、青い瞳は自分を映し出すほどに澄んでいた。

「あ、あんたそんなとこにいたの？ ご、ゴメン。気がつかないで・・・もしかして、聞いてた？」

「こっちこそゴメン。癖で隠れちゃって・・・君が助けてくれたの？」

少女は気が強うそうな・・・まあ、取り繕っているだけのように見えるのだが、そんな感じに腕を組んでまっすぐ目を見て、赤く綺麗な唇を開く。

「そうよ。たいしたことはしていないわよ・・・ただ、家の前に倒れてたから家に入れて寝かせただけ」

「やっぱり、命の恩人だ。ありがとう」

渾身の笑顔。もはや、どれが本当なのかも分からない。だが、言葉を選んで、慎重に探りを入れるように、あくまで感謝の意を見せる。

「・・・ウザイ」

「え？」

次の瞬間、殴られた。

理解は出来ず、ただ呆然とそらされた顔は九十度逆を向く。

視線と顔の向きを少女に戻すと、機嫌を損ねた鬼がそこにはいた。

「私、嘘が嫌いなの。強いて言うなら冗談とかも嫌い。そして、そういう取り繕った笑顔は殴りたくなるの。もう一発いい？」

「・・・」

理解できずに、呆然としてしていると躊躇無くもう一発飛んでくる。

「う、うめんなさいー！」

咄嗟に目をつぶる。

・・・。

来るはずの衝撃来ないことに気がつき、目を開けると・・・ほん

の数センチの距離に少女の顔があった。

「ホントね？ これは契約よ。もし、次があったら……撲殺するから」

「は、はい」

「……よろしい!」

目の前で笑顔に変わる。それは、花が咲くような綺麗な変化。

「ねえ、お腹空いてない？」

「い、いや別に……空いてます」

少女が拳に力を入れたのが分かり、咄嗟に口から言葉が出た。

「私フィーリア。フィーリア・エルファイムよ。……友と呼べる者はいないけど……フィーって呼んでもらえるとうれしいわ」

「わかった。改めて、フィーありがとう。俺はシン。ただのシンだ」

「シンね。分かったわ……じゃあ、詳しいことは食事しながらでも」

その提案に頷く。

部屋の中であまり外の景色には気がつかなかったが、外は朝。

テーブルに並べられた料理は、どれも一つだった料理を無理矢理二つに分けたような様で、目玉焼き卵が黄身が真つ二つで中身が流れ出している。

用意された量は決して少なくはない。さっと作ったであろう野菜炒めや、山積みのパンがその多さですでに満腹感の六割は満たされるほどだ。

「出来たわ！ さあ、食べましょう」

その声にハツとし、苦笑いを浮かべると強い視線が向けられたが、「う、うん」と小さく頷き椅子に座る。

「いただきます」「感謝します」

・・・沈黙。信仰の違い、あるいは・・・そう、カルチャーショック！

「変わってるわね」

「そうみたい」

その後の食事は静かなもので、団欒とはほど遠い。

食べ終わると、フィーは神妙な趣でシンを見つめる。

「シン。あなたは・・・その・・・帰るところはあるの？」

「・・・ないよ」

「そう。じゃあ、私のために死を覚悟する気はある？」

「・・・？・・・？・・・？」

答えは出ない。当たり前だ。出会って数分、命を救われたからと言ってそんな問いにホイホイと答えられるほど短絡神経ではない。

「質問を変えるわ。私の命を・・・人生を救ってくれない？」

「いいよ」

シンは自分でも理解できないが、そう答えなければいけないように感じた。

決して。決して、拳を握る音が聞こえたとか、テーブルがギシギシ唸ったからではない！と言い聞かせながら。

そして、フィーは言葉に出来ない「ありがとう」をシン両手を取って伝える。同時に溜めていた力も向けられたわけだが、悪い気はしなかった。

マゾではないと言い聞かせながら。

・・・。数分し、フィーの喜びが収まったのを見計らって、詳細を聞くとした。

「詳しくは、何をすればいいんだ？」



「え？ あ、そうね。・・・私の従者・・・そして、使い魔になってほしいの！」

理解が出来なかった。

だが、もはや引き返せない。なぜなら、この段階での拒絶はさつき言葉を「嘘」にすること。

すなわち、「死」を意味するからである。

シンは更に落ちるのであった。

報いと始まり。(後書き)

書き方が分からない病です。

お願いです！ 誰かー誰かーアドバイスカ要望をつ！  
ネタがほしいー

他力本願ですね

## 世界と真実。

目が覚めて、開口一番に出たのは。

ハア！。

声にならない何かを代行するため息。

シンはベットに横になり、今の現状と真実を改めて考え直す。

「異世界、フォロンティア？ それに、この世界には異なる者しかいない……」

それは、食事が終わり、一悶着があった後、現状を把握する為にフィーに聞いた。

「フィー。聞きたいんだけど」

「何？」

とても機嫌がよく、笑顔でこちらに返答する。

「その……従者ともかく。使い魔ってなんのことかなーって思って」

「え！？ 使い魔……知らない？ 魔力あるんでしょ？」

「魔力って……どういう……」

シンは顔が青ざめる。

目の前にいるフィーが、異なる者である可能性が浮上したからである。

「魔力も知らないの？ ホントに？」

フィーは珍獣を見るかのようにしてシンを見つめる。

「おかしいわ！ だって、この世界はフォロンティアよ。頭大丈夫？」

「フォロンティア？ 世界に名前なんてあるのか？」

「・・・重傷ね。記憶が混乱してるのか、それとも、あんたは余程の世間知らず・・・常識知らずね」

フィーはどこか呆れを通り越して、椅子に深く座り呆然としていた。

そして、少しの静寂の後、「仕方ないわね」と言っただけで立ち上がり、シンに「嘘じゃないわよね」と確認するかのように強い視線を向けて、重い口を開く。

「まず、これだけは言っておくわ。この世界の人は誰であろうと、魔力を持っているわ」

その一言にシンは・・・軽い目眩を起こすが、フィーは気がつかなかった。

「……暴走は？」

「何それ？ そんなおかしいことにはならないわよ」

シンは世界が揺らいでいくのが分かる。今までの常識がすべて崩れたのだ。

そして、皮肉にもシンが最も嫌いな学者……とは言っても公に知られてはいない異なる者を狩る側の学者だが、その学者の論文が頭をよぎる。

その内容は、暴走の原因とはその存在による比率と比重による世界の歪みが原因であるとするもの。

要するに、異なる者の割合が少なく、その力は強大過ぎるが故に存在が世界そのものに沈み、本質に迫るからである……らしい。

よって、今いる世界ではその存在が覆って

これが現実。

「フィーすまない。ちょっと、休ませてくれ」

シンの異常さが伝わり、フィーは何も言わなかった。

さつきまで眠っていたベッドのある部屋に逃げるように入る。

嫌に静かな部屋の中。

ベッドは静かに眠りを誘い、情報を整理するために眠りにつく。

すでに外は暗く染まり、夜を告げていた。

今のシンにある選択肢は二つ。

一つ、フィーの為に生きること。

一つ、この世界を壊すこと。

「ふっ。あはははっ！」

笑い出す。

シンには二つの選択肢がアルにもかかわらず、出せる答えは一つしか思いつかなかった。

「俺は、どうやら楽しいらしい」

思い浮かぶのはフィーの笑顔。

それは償いだと言い聞かせる。

とても、とても楽しく痛く命と同じだけのものを背負うという償い。

シンは窓から注ぎ込まれる月夜の光に酔いながら朝を待つ。

世界と真実。(後書き)

やばい短いけど。

ギリギリの毎日投稿完遂中！

ぐだぐだですみません〜

## 従者と学園（前書き）

人物像について

シン 16歳の少年

黒髪に黒い瞳。異端殺しの傭兵兼殺し屋。

身体能力S 戦闘技術SS 魔力AA 異能<sup>なし</sup>N 魔術技術？

フィーリア・エルファイム 16歳の少女

銀髪に青い瞳。身長ふつうで何故か殺気を身につけている野生？少女。

身体能力S 戦闘技術B 魔力E（最低ランク） 異能？ 魔術技術E

こんな感じですよ。



## 従者と学園。

朝が明けた。

早く目が覚め、おもむろに外へと出ると、まさに森の中にポツンと孤立している家だった。

目の前にはどこかへと続いているであろう道。あとは生い茂る木々のみ。

「綺麗だ」

思わず声が出るが、すぐに何か・・・違う何かを感じた。

「誰だ？」

「・・・おやおや。まさか気づかれるとは思いませんでしたよ」

まるで空間が裂けるかのようにして、何も無い空間からタクシード男性が現れる。髪は白髪で、赤い瞳が恐怖を思わせる。

「こちらはフィーリア・エルファイム様の邸宅と聞いていたのですが・・・親族ではないようですが？」

「ああ・・・俺は・・・従者だ」

「なるほど。了解いたしました。申し遅れましたが、私はイルフ・エドール。この度、フィーリア様の入学いたしますエーゼル学園の人事を担当しています。どうぞ、お見知りおきください」

男は軽く会釈。そして、ニタニタと笑いながらこちらをなめ回すような視線を向けてる。

「なにか？」

「いえいえ。なにぶん、人を使い魔にしようとするのは何処その清廉たる貴族か・・・あるいはバカなお方のみで、久しぶりだったもので」

「そうか。たぶんバカなほうだ」

「ふふつ。ご謙遜がうまいですね。あなたほどの従者がいれば・・・使い魔なんてただの歯車にすぎないでしょうに」

「・・・そういう能力か？」

「ええ。ですが、それだけですよ」

シンはふと一つの疑問にたどり着く。

何故フィーはそれほど珍しい人の使い魔を得ようとしているか？  
ということだ。

「すまない。フィーの入学について、どうなんだ？」

「どう・・・ですか。それはそれは、勉強においてはトップ、身体測定おいても上位ですよ」

「魔力には触れないか」

「どうやら、知らない様子。これ以上の詮索は無神経ですね・・・  
それでは、またお会いできる時を楽しみにしていますよ」

何事もなかったかのようにイルフと名乗った男は再び虚空に消え、  
その気配すら感じなくなった。

家の中に入り、数分後にフィーが起きてくる。

「おはよう。早いわね」

「まあ、いろいろと考えることがあって」

フィーは「そう」とだけ相づちをうつって台所へと姿を消す。

朝食後、朝の出来事を話すと・・・殴られた。

「な、なんで殴る!?!」

「え? あ、ごめん癖よ」

「・・・」

「やめてよ。そんな目で見つめらるとこっちは・・・殴りたくなる  
じゃない」

シンはどうやって殴られるのだと悟り、距離を取って再び話す。

「魔力によつて発動する能力について改めて聞きたいんだけど」

「能力？ 異能のことかしら？」

「そう呼ばれているんだつたらそうだと思う」

「フィーは少し首を傾げ、考えてから順序を立てて話す。

「まず、異能は一般的に一人に一つ。もちろん、例外はあるわ。で、それを発動するために魔力を消費するわけ。そして、使い魔がいる最大のメリットは様々だけど、大きく分けて三つ。サポートとしての役割、異能の拡張及び併用、魔力共有ってとこ。理解できた？」

「ああ、じゃあ使い魔ってなんだ？」

「そうね。詳しくは分からないの。でも、普通なら契約召喚・・・魔力を使つて最も合う使い魔を召喚するって方法。そのほとんどは神話や伝説や架空の生き物ね」

「・・・じゃあ、フィーはなんで召喚しないんだ？」

「そ、それは・・・」

「それは？」

「・・・ないから」

「え？」

「魔力が・・・無いのよ」

フィーの目元には涙がたまっていた。

「おかしいよね。みんなあるのに・・・私だけがないの。だから、友達はいないし、親族もとうの昔にいないの」

どんどん空気が重くなっていく。

「忘れて・・・やっぱり忘れて。昨日のは嘘よ。明日にはここを発つつもりだから、この家は自由に使って！」

フィーは可愛らしい笑顔。

嘘・・・それは嘘だな。ほんと、楽しいよ。

シンはフィーを抱きしめる。

「え！？ えー！ー！。な、なにしてんのよ！」

「俺も嘘は嫌いみたいだ。・・・そ、その、契約だ。・・・次があったら、またこうする」

顔は見えないが、体に伝わる熱が高くなるのを感じた。

「魔力なんてなくていい。俺がフィーの魔力で異能だ。だから、俺を使ってくれ使い魔として」

「うん。ありがとう」

急に恥ずかしくなって、シンは離れようとするが、腕をつかまれてフィーの顔と向かい合う。

いつもの楽しそうな笑顔。可愛さは無いが、そっちの方が魅力的に見える。そして……。

拳が顔面を貫く。

照れ隠しにしては、躊躇がなかった。

そして、改めて思い知る。フィーは、殴るといふ行為でしか感情を表せない不器用で、その上で喜怒哀楽が激しい。

それが、楽しいのだと。

従者と学園。(後書き)

疲れた。

文章力無いなーと思い知る。

戦闘はまだ少し先です。暖かいまなざしでお願いします！

## 到着と新居

おかしい。

目が覚めると、そこは・・・見知らぬ天井。

目の前には一つの椅子がある。

シンは覚えていた。それは、列車の中だ。

「どうなってる」

シンは覚えていない。夕食を食べ、その後の記憶がほとんど無い。

揺れる車内。外から見える景色は自然が多いという外に出たときの印象と変わらない。

「起きた？」

「フィー・・・どういうことだ？」

「うん。夕食に睡眠薬を混ぜたの」

「・・・なるほど。二度とフィーの料理は食わない」

それにしても、この車内まで人一人（これでも普通の少年とかわらない）を持って入るって・・・わかつてはいたが、フィーはおかしい。



「で、なんで俺を眠らせた？」

「それは・・・一人分の移動料金しかなかったし・・・気が変わったとか嫌だし。それに、お金無かったし」

途中、フィーが顔を赤らめ、可愛いと思ったが最後の言葉でその感情は冷めた。

「結局は金か」

「そうよ！ わるい？ だってこうしないと・・・ほんとに学園まで行けないんだもん」

ほんと退屈しないし、やっぱり楽しい。

シンは外を眺める。

今までの人生・・・ここまで親しく接することが出来た人はいないと思う。

だから、大切にしたいと

「のど渴いてない？ これあげる」

フィーはよく登山などに使用する鉄製の平べったい水筒を差し出す。

「ありがとう」

前言撤回。

「うっ。」「これっ！」

「うん。使った睡眠薬の原液。おかしいわね、本当なら学園の宿舎までぐっすりのはずなのに・・・もしかして、前に服用したことがあるっ？」

「あ、ああ」

シンはもはや思考もまとまとまららない。

死ぬ。永久の眠り・・・。

シンは・・・人間不信になりそうなのを、必死に優しさだ！と押しさえつけながら、目覚めるかどうかもわからない眠りに引き込まれた。

バシッ！ ガシッ！ ジュッ！

痛い痛みがまだ眠りが勝っている。

ダンッ！ ドンッ！ ガッ！

痛い痛い痛いっ！

「いてー！ー！」

「うるさっ！？」

バンッ！

飛び起きたところをクリティカルで殴られる。

そして、倒れるまでの瞬間に見た周りは白くて綺麗な部屋だった。

「フィー。いい加減なぐるのやめて。お願いします。土下座でも何でもするからっ」

「……じゃ、じゃあ、土下座して」

言われたとおり、土下座する。

「プライドないの？ ったく、興奮するじゃない」

「俺さ、帰るよ」

「いいわよ」

「え！？ ほんとにいいの？」

希望に満ちた笑顔をフィーに向けると。

「うん。あなたを撲殺して、私も・・・その罪悪感に苛まれながら生きるから」

言っていることは素晴らしい。だって、罪を生きて償うのだ。こちらの死んで償うなんてバカなやつより幾分マシだが・・・。

フィーがそんな女々しい感情に苛まれる気がまったくしない。

「す、すみません」

「えー逃げてよ。追いかけるから」

「こえーよ。それリアル鬼ごっこだから」

騒いでいると、どうやら部屋の外に誰かがきたことにシンはいち早く気がつく。

「ちよつとストップ。誰かきた」

シンはそう言うと、追うようにしてノックする音が響く。

「すみません。何かありましたか？」

。。。。  
少しオドオドしく、震える少女の声。それを聞いて、フィーは。。。。

「ど、どどどどっしょ」

完全に落ち着きを失っていた。

そして、他人を意識して生活していなかったせい、鍵を掛ける癖がなかったらしい。

開くドア。そこに立つ青髪の少女が・・・悲鳴を上げた。

「きゃー！ー。男っ！」

あれ？

「どどどどっしょだっしょ！」

「・・・きゃー男・・・」

「何言ってるやがる。フィーお前なっ！」

ほとんど棒読みで少女の言葉を真似たフィーをにらみ、そのまま何階かもわからない窓から外へと飛び出す。

三階。

このくらいなら大丈夫だ。

何事もなかったかのように綺麗に着地し、どこかわからないその広い敷地を駆け巡る。

「覚えてる。あとで、絶対に・・・」

その先は何故か言葉が出ない。

何故か・・・恐怖されるものがあった。

「俺って・・・調教されてる？」

むなしくなりながらも必死に走る。安全圏を探しに。

到着と新居（後書き）

ひさしでした。

もう・・・つらい。

時間がく時間がく

車が・・・車が・・・教官こわす。

希望と友(前書き)

矢部ー！

誰っ！？

みたいになつまらないノリ。

真面目に書きますw



## 希望と友

後悔している。

離れすぎたことにだ。本当であれば、あまり離れずに伺って戻る考えをしていたのだが、どうやら本能が「逃げる」といつていた。

「何処だ？ ここ」

異常に広い庭。宮殿を思い浮かべてもその斜め上をいく広さ。

しばらく歩くと大きな湖が自分を映していた。

そこに映る自分。

さつき、突然悲鳴を上げた少女を見たとき・・・無意識にも殺意を覚えた。

「なんだよ。俺って殺すことに正義なんて感情で誤魔化して・・・  
本当は殺したいだけなんじゃないか？」

自分に語りかける。

「お久しぶりです」

「っ!？」

咄嗟に体が動き、背後にいる何者かに拳を放つ。

大きな音とともに受け止められ、冷静にその何者かを確認すると見覚えがあつた。

「あなたは・・・イルフ・エドールだったか？」

軽く会釈をするそのタクシード姿の男は、学園の人事と名乗つていた男。

「再びあえたことを光栄に思います。ところで、こんなところで何を？」

まるで今の出来事なんて無かつたかのように話を進める。

事情を説明すると、「なるほど」と苦笑いを浮かべて歩き出す。

「事情はわかりました。まあ、こちらの不手際もあると想います。なので、付いてきてください」

イルフは背中越しにいい、それについて行く形で会話を続ける。

「それにしても、あの拳・・・なかなかの強者ですね」

「・・・どこから聞いていた？」

「すみません。初めからです。はぐらかすつもりはなかったのですが、深く追求されても困ると想いまして」

「すまない。あと、さっきの拳を受けたときのあれも能力か？」

イルフは立ち止まる。

「驚きました。この手の知識がないと想っていましたが……。  
ええ、あれは私の異能で加速アクセラと言います。珍しくはありませんが、  
この手の異能は使い方次第では」

「いくつ持つてる？」

「……秘密です。こればかりは手の内ですので」

再び歩き出したイルフは明らかに異なっていた。

空気……いや違う。雰囲気……いや違う。存在……たぶん  
これだ。

一瞬にして何かが変わったのがわかる。それがどんなものなのか  
はわからない……だが、危険だと言っている。本能が。

「それも、異能か？」

「……」

鎌を掛けたのだが、どうやらある程度は頭がキレるらしい。

「答える気はないか。でも、あんたは何か知ってるな俺のこと」

「……」

「黙秘か。良くできている人形デクだな！」

懐から取り出した拳銃で不意打ちを狙うが……。

加速し、拳銃の弾を弾き、そのままこちらへと一撃を向ける。

「本体であり、本体ではないか」

「っ!？」

次の瞬間、明後日に向かって放たれた銃弾が弾かれた。

イルフとシンの間に出来た距離。流れた沈黙は、シンの戦意の喪失を告げるようにして湖に投げられた拳銃がポチャンと響く。

「それがもう一つの能力・・・分身・・・いや、もっと高度な・・・」

シンの推測に降参したイルフが笑いながら口を開く。

「おもしろい。私の能力を二つ目まで初見で悟られたのは初めてだ」

「で、どうなんだ？ 正直、居心地が悪かった」

背後からまったく同じ声が響く。

「ああ。分身などでは比べものにならない。これは七つの運命。平セブンスポート行する七つの世界を引き寄せるものだ」

その庭に二人のイルフが姿を現した時点で異常だ。

「なんて、めんどくさい」

「すまない、試させてもらった。この能力で、平行する世界で行った結果を知ること出来る。簡単に言えば未来予知や因果操作にも近い。もちろん、パラレルワールドであって確率は七分の一だ」

交互に言葉を交わす同じイルフが気持ち悪くも感じられた。

「で、俺に戦闘を仕掛けた未来を見たってどこか？」

「ええ、そのとおり。でも、今のようない見抜かれた結果ではなかったので驚きました」

「何か異能でも使用なされましたか？」

その言葉に少し気分を悪くしつつ、首を横に振る。

「これは異能ではない。お呪いだよお呪い」

「そうですか。では、改めてあなたに合わせたいお人がいます」

結構なご身分だな？

そう言いそうになるのをこらえ、庭を抜けると、大きなお屋敷がそこにはあった。

そして、出迎えは・・・金髪の可愛らしい青いドレスにの少女。

「やあ、シンさん。お待ちしております。・・・あちらの世界にいたときから」

希望と友（後書き）

ヤバイ。

いきなりの戦闘とネタバレかつ！

こんな感じですよ。やっぱり見苦しいかも。  
すみません。精進いたします！

## 黒幕と白幕

豪華な部屋。

ありとあらゆるところに設置された鏡や水晶が目につるぞい。

「さてと、何から聞きたい？」

長いテーブルの両極端に座る。イルフは少女の隣に立つ。

シンと静まり余計な雑音がない部屋は、少女の透き通った綺麗な声がよく響く。

「まずは、何故俺がこの世界に来たかについてだ。何か知っているか？」

「うん。それは干渉したからだよ僕が」

「何故だ？」

「んーと。シンさんは」

「シンでいい」

「うん。シンはイルフのもう一つの力は知っているね？」

「ああ、七つの運命だろ？ 干渉まで出来るのか？」

「いや、ムリだよ。あくまでシンを見ることしかできない。あくま

で干渉したのは僕だ」

「……話がみえない」

「すまない。久々の会話だったもので少々話ベタになっていたようだ」

少女はイルフとアイコンタクトをすると、突然立ち上がったこちらに向かって歩み寄る。

「自己紹介がまだだったね。僕はルーゼ・エリザリア・ルーゼンセルス。長く廃れた名だよ、ルーとでも呼んでくれ」

「微妙だな」

「そうかい？　だそうだよイルフ」

「申し訳ありません」

今のあだ名？はイルフが考案したようで、にこやかに軽い殺意を向けてくる。

「では……真名を教えてあげるよ。僕の名前はデウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神。マキナと呼んでもらってもかまわない」

「……」

驚き、よく理解できない頭のまま。

マキナはシンの目の前まで来て、そのまま見下ろす形で微笑む。



「マキナとはあの機械の神のか？」

「間違いじゃないけど、厳密には機械を依り代とした雷の神。情報の神でも間違いではないよ」

「で、その神様はなんで俺を助けた？」

「ついでだよ。一石二鳥。暇つぶし」

マキナはくるくる回ったり、右手で虚空を指したりと機嫌が良さそうだった。

「で、なにのついでだ？」

「そうだな。世界の変化はいつ起きるかわからないから、調節するために加速器ブースターを生み出したんだけど・・・思った異常に加速しすぎたから取り上げようとしたら。その穴に落ちたみたいな感じだよ」

「よくわからない」

「説明下手でゴメンね。まあ、簡単にいえば偶然だよ」

運命なんて信じたりはしないが、どうしてかそれは仕組まれたかのように想える。

だが、目の前のマキナはニコニコ笑うだけで明確な答えは教えてもらえそうにない。

ため息と同時に席を立つと、そのまま玄関へと向かう。

「もう行くの？」

「ああ、俺のご主人様がたぶんそろそろ痺れをきらして、拳を握ってお出かけししそうだからな」

「残念。女子寮ならこの屋敷を出てまっすぐだよ。後は・・・もうすぐ入学式だ。君も出席するといいよ。その愛しいご主人様を不機嫌にしたくなければね」

どこか意味深な発言をあえて気にせず屋敷を出て、フィーの待つ部屋へと向かった。

運がいいのか悪いのか。

ちょうど、入学式に向かう集団に出くわす。

男子の姿を見て、女子校ではないことがわかりほっとし、フィーを探そうとしたが人が多すぎて困難だ。

「一度女子寮に戻るか」

行列を横目に女子寮に向かい、飛び降りたであろう部屋を探す。

いた。

三階の端の窓・・・異様な殺気が溢れていた。

「フィー。いるか？」

言葉をその窓に向けて言うと、突然開き、黒い人影が位置エネルギーを利用してこちらに向かって襲いかかってくる。もちろんフィーだ。

さすがに受けるわけにもいかず避けると、追撃の一撃が放たれたのでそれを片手で受ける。

「遅い。いままで何してたの？ 殴るから説明して」

「普通逆じゃない？ そ、それよりも入学式」

「くっ。それもそうね。急ぐわよ」

あえて、「待っていてくれたのか」とは言わない。逆に殴られそうだし、何よりいきなり走り出したフィーに言葉を掛ける暇がなかった。

話されないようにしてフィーを追いかける。

改めてフィーの身体能力の凄さを認識した。

女子寮から入学式が行われる闘技場のようなドーム型の建物まで感覚ではあるが六百メートル。それを四十秒弱で走りきり、息も切れないところを見ると本気ではない。

だが、それだけの早さで走ったにも関わらず、そこで待っていた

のは聞き覚えのある声が響き渡る光景。

「ちようどいいね。遅れてきた二人。君たちには罰として手伝ってもらおうよ」

丸い客席の目線がすべて集まり、その中央に開けて、客席から高さを置いているスペースにマキナとイルフ、そして先生と思わしき人が数人こちらに目を向けていた。

混乱するフィーをみて、気づかれないように小さくため息をついて「こういうことか」とマキナを睨む。

「まあ、そう怒らないですよ。君たちにも遅刻してきた非があるんだから・・・そうでしょ?」

含みのある言い方に折れて、シンは潔く諦めてうなだれた。

「うんうん。じゃあ、ここまで降りてきて。裏手に別の入り口があるから」

シンは混乱し呆然としているフィーを引きずり、一度闘技場から姿を消し、マキナのいたスペースに降りる。

姿を現すと、マキナとイルフと先生と思わしき人たちは観客席に移動し、代わりに青い髪に黄金の瞳の少女が腕組みをして立っていた。

「来たようだね。じゃあ、剣見けんみを始めるよ。そこにいる三年のミリア・ヴァルヴィレと模擬戦してほしい」

いきなり理解できないことを言われシンは「なんだそれ」とフイーに小声で言うが、まだ頭の中が混乱しているらしく、返答はない。すると、ミリアが口を挟む。

「よろしいのですか？ 本来、剣見は三年と一年の優秀者を一人ずつ競わせるもの。それを適当に選び、その上二人など」

「ああ、大丈夫だよ。すべて満たしている。彼女、フイーリア・アルファイムは学科トップ、戦闘技術も上位。そして彼は彼女の使い魔だ」

「使い魔？」

ミリアが驚き、観客席がざわつく。

「めずらしいけど。正真正銘の使い魔だよ・・・人間のね。今は廃れてしまったけど、人間同士で契約することも出来る。今は召喚が出来、最も自分に合った者と契約できるから忘れ去られてしまったけどね」

少しの間を置き、ミリアは納得し構える。

「そういうことならわかった。では構える新入生」

二人に殺気が向けられるが、臆することなくようやく理解できたフイーがシンに向かって拳と言葉を放つ。

「あんたのせいよっ！ 避けるなっ！」

シンは拳を避けるなど言われたので受け止める。

「ついてないわ・・・準備はいい？」

「ああ」

シンは前、フィーは後ろで強いまなざしをミリアに向けると、マキナが声を発した。

「よし。じゃあ、始めよう！」

剣見が始まった。

## 黒幕と白幕（後書き）

投稿ミスりました！

ごめんなさい

しかも、消えたからなんかデタラメぽいです

## 絆と契約（前書き）

投稿ミスりまして、

前の話をに追加しました！

すみません！



## 絆と契約

始まると同時。動き出したのはミリアだった。

こちらに走り寄りながら左手に光の剣を出して、間合いを詰めてくる。

それでも、二人は動かなかつた。

「はっ！」

振り下ろされる斬撃。

「なっ」

シンはそれを難なく避け、剣を握る左手首をつかむ。

もちろんそれで終わるようなミリアではない。

突如、右手でもう一つの光の剣を出し、切り払いシンから離れる。

それは二人にもいえたことで、一枚岩では無い。

距離を取ったミリアの背後にフィーはいた。

「くっ」

ミリアは体をひねりながらフィーが放つ一撃を両手の剣で防ぐが、やはりフィーの威力を見誤り、空中に放り出される。

剣は砕け、ミアは片膝を着く形で着地する。

「さすがだ。やはり使い魔を出さずして、戦いにあらず……こちらも本気でいこう」

ミアは手を空にかざすと、空中に魔方陣が現れ、そこから悪魔が現れた。

黒い翼に黒い尾。人型の体にとんがった耳。そして、肉眼で見えるほどの異様な魔力。その力は圧倒的だった。

「我が主よ。久しいな」

「ああ、最近あまり戦闘はしないのでな。あと、殺すなよ」

「了解した我が主」

それを見て、フィーは驚きのあまりこちらに向かって駆け寄る。

そして、悪魔を指さしてこういった。

「あれよあれ！ シン、あなたもあんな感じで私に忠誠を誓って。あのゴキブリみたいなのも出来るんだからできるわよね？」

シンは悪魔の出現より、フィーの言動に驚いた。

「おい新入生。こいつはグレゴリっていう名があるぞ。それにどう見たらゴキブリだ？」

「え？ だって黒いし飛ぶし」

「「・・・」」

シンとミリアは言葉を失った。

「あははっはははは」

マキナは大爆笑し、観客はみな失笑。

肝心のグレゴリはこちらに手をかざし、戦闘準備を整えていた。

「いいから。フィー、ちよっと喋るな」

「あんた何様？ ちゃんと私に」

ミリアは軽く、冷たく「終わらせる」と発言した。

「我が主。終わらせるっ！」

グレゴリは大変お怒りだった。そのうれしさに満ちあふれた表情かざされた手から放たれる黒い複数の閃光が、不規則にねじ曲がりながら二人を襲う。

かなりの破壊力を持つその衝撃に、黒い霧が二人の状態をくらませた。

観客席からは「やりすぎじゃない？」「ヤバイだろ！」「強すぎでしょ」などの声が漏れる。

そんな声を察してか、マキナは声を沈める。

「静かにね。上にいる生徒に危害が加わることは内容に守られてるから安心してね」

あくまで、上にいる生徒のみに言う。

なぜなら……無傷のシンがフィーを抱きかかえて立っていたからだ。

「バカなっ!？」

ミリアは驚き、グレゴリに疑いの目を向ける。

「我が主……あれは本当に人か？」

その驚きは悪魔であるグレゴリも感じていた。

「なんてももの撃ってやがる。死んだらどうするんだよ」

シンの平然とした声で言うと、ミリアは「何故だ」と言わんばかりの視線を向ける。

それを見て、シンは殺意のこもった瞳で見返す。

「じゃあ、こっちも本気を出」

「ストップ!」

マキナが止めた。

「ああ。わかったけど・・・これ公平じゃないね」

その言葉に激しく激怒したのは誰でもないミリアだった。

「学院長！ それはどういうことですか？ まさか、私達が弱いと

」

「ストップ。君も早まらないで。ただ単に、彼と彼女が正式に契約を結んでないってわかったから止めただけだから」

フィーの顔を青ざめる。逆にシンはマキナが学園長で有ることに驚いていた

それを見てマキナは言葉を取り繕う。

「あ、安心していいよ。別に退学なんて言わないよ。実際、人と人同士の契約なんてもう忘れ去られたもの一つだから、知っている者が少ないのは当たり前で仕方ないからね」

ホッとフィーは胸を撫で下ろし、マキナを見据える。

「では、どうすればいいんですか？ 学園長は知ってるんですよね？」

敬語のフィーに気持ち悪がるシンは、同じくマキナに殺気を向ける。

「そつ焦るな。まあ、簡単で今すぐにも出来るが・・・いいの本当に？」

「はい」「待て」

「なるほど。もう決意は出来てるみたいだな。よし、じゃあ今から術式を出してやる」

「ま、待てっーーーー」

シンの叫びは無視され、イルフが短刀を五つこちらに向かって・  
・確実に外した上でシンに弾かれない位置に加速して投げる。

「なっ!?!」

不敵に微笑むマキナの笑顔。恨んでやる!

地面に刺さった短刀から光が溢れ、大きな魔方陣で囲まれ、ドー  
ム型の結界を生成する。

「神の名を借り、この場において破れぬ最古の絆を見届ける。紡げ、  
繋げ、結合せよ。・・・汝の契約見届けられたっ!」

結界が破れ、二人に右手に赤い刻印が浮かぶ。

「ありがとうございます!」「何故だっ!?!」

「お礼はいいよ。僕は見返りなんて求めない主義なんだ」

「おいおい! マキナっ! 普通、契約ってのは同意の下じゃない  
のか!?!」

「えー。だから言ったよ。神の名の下にっ。あれ、強制」

「なっ!?!」

絶望していると、優しくフィーがシンの肩に手を置き、振り返ると笑顔がそこにはあった。

「そっだよな。フィーも少しは同情して」

「お手」

「するかっ!」

差し出された片手の平弾く。

客席の反応は珍獣を見るそれに似ていた。

そして、呆然と見ていたミリアがマキナに強い視線を向ける。

「あの新入生の使い魔と繋がりがあったのですか？ まあ、それはともかく。再開してもいいでしょうか？ これで学園長のいう公平なんでしょう?」

「うん。いいよ」

突然再開された戦闘。

「しかたない。これは・・・使っなってことか。なら!」

シンはフィーを見つめて、納得したように指示を出す。

「魔力を渡すから、槍と剣、そしてランスを強く思い浮かべる」

「なにいつて」

「いいから！」

少し強い口調に渋々フィーは目を閉じて思い浮かべる。

「来いっ！」

不確かな感覚ではあったが、流し込むイメージを強くフィーに向ける。

ギン。

金属音とともに地面に槍と剣とランスが突き刺さっていた。

「成功。じゃあ、あの・・・グレ・・・グレゴ・・・ゴキブリ！あれは俺に任せろ」

「お願いね」

フィーはパチリを大きな瞳を開き、拳を握って構える。

「新生・・・後悔しろ」

さすがに怒りがピークに来たらしく、ミアは再び両手に光の剣を持ち、グレゴリも強く黒い霧を右手に巻く。



シンは剣を左手、槍を右手に持つ。

「さて・・・手加減なしだ」

表情が変わり、シンは無表情。垣間見せるのは殺意のみ。

絆と契約（後書き）

ヒートあぶ！

頑張って書きます！

## 本意と殺意

シンは駆ける。

あくまで目標はグレゴリ。

「G A A A !」

雄叫びのような奇声あげ、グレゴリは右手を払い纏った黒い霧を光線上に放つ。

だが、あくまでも無表情。シンはすべて紙一重で避け、無傷で間合いを一気に詰めて跳躍する。

それがわかり、咄嗟に黒い翼で更に高く飛び上がるうしたところを槍で一突き。

「G A ! ?」

槍は黒い右翼を貫き、防衛のために全身に更に濃い霧を纏うが、簡単にはとれない槍を踏み台にさらに跳躍し、真上から強烈な一閃。剣で普通では傷一つつけられないであろう黒い霧の鎧に一太刀を正確にその内に刻む。

槍での一撃で怒りを抑えたグレゴリはその威力を悟り体を反らす。が・・・右翼の切断。同時に砕けた剣がその堅さと威力を物語る。

そのまま、安定感を失い地面に着地する。

「なんだあいつは!?!」

その光景を間近で、それも一瞬でグレゴリを圧倒する少年に呆気にとられる。

だが、それだけでは終わらない。

グレゴリよりも先に地面に着地したシンは、既に勝利を確信していた。

シンの姿はランスの突き刺さっている位置にあり、それを引き抜いて、着地の回避不能の時を見計らって投げつける。

剣で裂かれた黒い霧の鎧は乱れ、更に高速回転しながら貫くランスは削り取るようにしてグレゴリの腹部に突き刺さり、威力を保つたまま観客席と隔ててある高さのある壁に貼り付けられる。

止まらない。止まらない。

シンはあらゆる思考を殺意に向け、とらわれ、命のそれを立つまで終わることが出来ない。

更にグレゴリに駆け寄りつつとした時。

「シン殴るわよっ!」

その言葉は、殺意のみの空っぽな思考に響き、我を取り戻してその場に呆然と立ち尽くす。

戦意を失ったミアは光の剣を地面に落とす、光の剣は消えて無くなる。

「ああ、止めたぞ。どうだ？」

振り向いたシンは泣き出しそんな表情で必死に笑顔を作り、フィーを見つめる。「これが俺だ」と訴えるように。

その異常さは誰が見ても歴然。

シンはそのまま歩き出し、フィーの横をすれ違いざまに「ごめん」とだけ告げて闘技場から姿を消した。

「バカ」

フィーは既に決めていた。

シンなら・・・信じられる。そうでいいなければ使い魔になってだなんて言わない。

「ここまでだね。はい、剣見は終わり。両方戻っていいよー」

ポンとマキナが手をたたくと、グレゴリに刺さっていたランスは消え、グレゴリは魔方陣につつまれて消える。

「さあ、フィーリア・アルファイム。君にはするべきことがあるだろっ？」

フィーは笑顔で語りかけてくるマキナにお辞儀して、シンを追いかける。

「まったく。凄いもの拾っちゃった彼女が捨てるなら・・・」

マキナの独り言は誰にも聞こえない。すぐそばにいるイルフにさえ。

釈然としないミリアはタイミング良くマキナの指示で来た教師に付き添われるような形で闘技場からいなくなる。

「じゃあ、取り直して入学式の続きするよ。・・・」  
「たいしたことなかったよね」

その言葉は明らかに異質。

「こんなものかな。後は、彼の・・・いや、彼女次第かな」

**本意と殺意（後書き）**

色々眠い。

熱出た

あんまり考えまとまらない状態で書いたので意味ふめいかもですw

## 本性と表裏

シンは自分を見ている。

本質的な意味と実質的の意味での二つを見比べる。

広い庭の大きな湖。どうやらここが気に入ってしまったらしい。

物心ついたときには既に武器を握り。ただ、敷き詰められた空っぽな自分を覆い隠すように取り繕う。

「見つけた！」

後ろから聞こえてきた言葉にどれだけ助けられただろうか？

振り返る。そこには当たり前のように腕を組んで、偉そうにこちらを見下ろすフィー。

「なんだ。やっぱり来たか」

「もちろん。私の使い魔なんだから・・・いつでもそばにいなさいよ」

「いいのか？　こんな化け物。お前の望むのは孤独じゃないだろ？」

シンは自分を指さし、「もういいよ」とばかりに苦笑い。

「もちろんよっ！　でもね、その中にシンもいるの。だってあなた



私の異能なんでしょ？ 本来、異能つてのは自分のなりたい自分への術。だから、私のなりたい私にするのは……」

フィーの大きな深呼吸。開かれる口に合わせて声が変わる。

「シン！」「俺か」

……

静寂の後に訪れたのは、明るい笑顔と笑い声。

「あははっ。やっぱり、シンといると変われそうな気がする」

「同感だ。フィーといると飽きない」

じゃあ、最初に歩みを始めて、進路を築かないとな。

シンはフィーに手を差し伸べる。

「俺の全部を掛けて変えてやる。俺は悪魔だぞ？ 契約破棄は出来ない。それでもい」

「 愚問ね」

言い切る前に差し伸べた手を強く握られる。

「落ち着いた〜」

満面の笑みを浮かべるフィーは・・・悪魔そのもの。

手を取った後に、予想は出来ていたがどこか気を許していた自分が悔やましい。

どうやら見える位置での打撃は控え、腹部にアッパーをかましたフィーの一言は「堅いわね」。そりゃどうもとばかりに地面に沈んでいるシンは緊張が解けたように倒れ込む。

すこしの間をおいて、フィーが隣に座る。

「シン。気になってたんだけど、なんで私の異能がわかったの？私ですら生まれてこの方一度も使ってないのに」

当然の疑問だ。

シンは俯せになっていた体を起こしてフィーの隣に座り、どこか嫌々に口を開く。

「ええと、まあ。はあ〜〜」

「話したくなければいいわよ？」

目が「言いなさいっ!」とばかりに主張している。

「わかったよ。俺の異能・・・とはたぶん少し違うんだが。どちらかというと使い魔に近いのが俺の目にいるんだ」

「目」？」

フィーは顔を近づけ、目を見つける。

間近で見るとやっぱりとても可愛らしく、シンは顔を赤らめて顔を背ける。

「あ、もしかして興奮したの？ 私に好きなだけ殴らせてくれるんだったら何してもいいわよ？」

「それは死ねと？」

「当然。世界は皆に平等なのよ」

「フィーは俺に不平等だ」

「そんなこと無いわよ？ 私、あなたほど優しくした覚えはないわよ？」

「そりゃ、一人で今まで生きてたら接点のあるのは俺くらいだろうしね！ だからってそれが基準だと思ったら大間違いだからな」

えっ！？ みたな顔をするフィーは、シンを見て一言。

「ごめんなさい」

「わかってくれた！？」

驚いた。シンの異見を聞き入れてくれたのは初めてな気がしたか

「うん。シンは、私と同じ人間だと思ってないからノーカンね」

「もっとひどかったー」

シンは頭を抱えて落ち込み、フィーはそれを横目で流し話の続きを追求する。

「それで、その使い魔について詳しく聞きたいんだけど？」

「あ、うん。じゃあ、最初からまず全部話すよ」

フィーに別の世界から来たこと、シンがあちらの世界でしていたこと、マキナのことを話す。

「へー。そうなんだ。まあ、どうでもいいね」

「いいのー!？」

フィーの反応は薄く冷たいものだった。

「それで、今度こそその目のこと話して」

「どうやら、興味があるのはシンのことではなく。シンの目についてが重要なようだ。学科トップはこの好奇心が原因だろう。」

「俺の元いた世界にあるお呪い・・・まあ、陰陽師っていう術師の家系に生まれたときに、俺は器としてありとあらゆる物を体に詰め込まれて育ったんだ。もちろん、そんなこととして平気なわけがない。さっきの暴走はそれが原因だ。まあ、それが原因で家を出たし、異能みたいのを使えた父を恨み・・・逆恨みで殺してた」

「うん。じゃあ、その目はその埋め込まれた物の一つ？」

「いや、入れられた物は全部俺の中で一つになって・・・魔力やこの運動神経に変わって、跡形もないし何があったかすらわからない。この目は陰陽師に伝わる式紙・・・使い魔みたいなものをベースにして、そこに悪魔なんかの存在を上書きして、更に別の存在で上書きすることによって形成されている」

「・・・。要するに、この世界の原理に置き換えると。契約召喚をするときに浮かぶ魔方陣をいじって呼び出したものを指定し、さらに呼び出したときに自分に最もあった形にして呼び出すってこと？」

「そうそう」

「うーん。なんで形を変えるの？」

「俺はそうしろって教わっただけで理解は出来なかったが・・・たぶん、そうしないと負荷がかかるんだと思う」

「負荷？」

「こっちの世界にあった暴走はその負荷が大きいから起こった。それと同じで、たぶんこの目という形をとることでそういうのから逃

れてるんだと思う」

「じゃあ、こっこの世界なら実体化できるんじゃない？」

「かもしれないけど・・・たぶんこれ以上は俺が暴走する」

シンは申し訳なさそうな表情でうつむく。

「いいわよ別に。あれだけ出来れば十分よ。後、最後にその目の元になってるのは何？」

「え？ ああ、サトリっていう妖怪・・・じゃなくてゴーストの類が元。相手の考えを呼んだりするんだけど・・・暴走ギリギリまで強めれば回避や能力解析とかもできる」

「なるほど。それで私の異能がわかったのね」

満足そうに微笑むフィーはやっぱりどこか変わっているとしか思えない。

でもそんなところがあるからこそ・・・。

フィーは立ち上がる。

「戻るわよ。私が責任とってあげるから。シンは私に一生ついて来なさいっ！」

本来なら、男のシンが言うべき台詞。

それにどこかプロポーズに似ているが他意はないのだろう。

平然といえるフィーはとても大きく見えた。

「はいはい。ついて行きますよ」

心のそこからの笑顔。彼女のそばだからこそ知った自分の笑顔だった。

**本性と表裏（後書き）**

熱がさがらないーーー

いったん章で切ります。

後々ちゃんと整理しますごめんなさい ^ - ^



## 開校と友

シンはハウスタストに悩まされていた。

目が覚めると屋根裏部屋の埃がシンの黒い髪を白くする。

「なんで・・・俺は男子寮にすら入れてもらえないんだ！」

入学式後、シンはマキナに屋敷に来るように呼び出された。

「来たね。シン、君を待っていたよ」

マキナの笑顔は入学式、ドーム型の闘技場で見かけたあの何か含みのある笑顔。

「何企んでる？」

「企むとは無粋だね。感謝したまえ、シンがフィーリアと同じ女子寮に住めるように手配してあげたんだから」

「なん・・・だと」

シンは顔が引きつる。

シンの考えでは男子寮に入るつもりだったのだが、女子寮となれば色々大変だ。

そして何より、フィーから極力近づかずに生きていたい。

「いいのかよっ！ 女子寮に男って」

「いいよ。僕にはね、戦闘能力はほとんど発揮できないけど、情報改ざんとか出来るんだよ」

ニコニコと笑い、ナイフを左手に持つ。

「たとえば、このナイフ『見えないよね』」

手からナイフが跡形もなく消える。

「そういうことか・・・確かに見えない。だが、そこにあるんだろ？」

「正解。やっぱり君には子供だましかったかな？」

まるでガラスが砕けるようにしてナイフが再びマキナの手に現れる。

「だから、安心していいよ。この学園での君たちは普通なんだから」

たくっ。これだから、神様を気取るやつは嫌いだ。

「マキナ・・・お前、孤独だな」

「そうだよ。僕は孤独だ。でもね、僕にだって人と同じく欲するものがあるんだ」

その表情はシンと重なる物があり、それ以上は言葉が出なかった。

「これは貸しだ。俺は借りは返す。だから、これ以上それで隠すなよ」

「……まったく。君は彼に似ているよ」

「誰だ？ お前が助けようとしたやつか？」

それ以上、マキナは答えず。

イルフにつれられて女子寮の屋根裏部屋につながる野外の螺旋階段に案内された。

そして、一晩過ごして迎えた朝が……真つ白だ。

螺旋階段を下りて、外へと出ると一人の生徒と出くわす。

「ハッ。タッ。ヤッ」

赤い髪の少女がレイピアを右手に持って突きを繰り返す。

筋は綺麗そのもの。だが、実戦を考慮されていないところを見ると、おそらく一年だろう。

数分間の鍛錬。綺麗さを見ればそれは芸術。

「誰かいるのですか？」

「こちらを振り返る少女は瞳は同じ黒。整った顔につり上がった目がどこか……フィーとにた感じを感じさせる。」

「すまない。筋が綺麗で見とれていた」

「あなたは……剣見の時の人ですよね？」

「ああ……シンド。おそらく年は君と同じだよ」

「え!？」

よっほど驚いたらしく、手に握ったレイピアが地面に落ちる。

シヨックだ。そんなに老けているとは思わない。これでも平均的な15歳の少年なのだから。

「そんなに、老けて見える？」

「え!？ い、いえ。かなりの実力でしたので、私の父の友と同じく長寿な部族のお人だとばかり」

「そう？ 身体的にはフィーと変わらないと思うんだけど」

「……経験が違います」

「そうか。わかるのか。経験を積んだ人間なんて……たかがしれてるよ」

その言葉に気を悪くしたらしく、少女は声を張り上げる。

「それは侮辱ですかっ！ 戦や多くの死線を越え、その力を国へと反映させる。私はそうは思いません！」

「……うらやましいよ。君にはそう思える人がいる」

「それはどういっつー！」

「じゃあね」

シンはその場から立ち去ろうとした時、少女はレイピアを拾い戦意を向けるが……。

「やめときなよ。君には戦闘は向いていない」

その声が響いたのは少女の背後。

振り返るが、何処にもシンの姿は無かった。

取り残された少女は、おもむろにある言葉を思い出す。

「父も私に戦いが向いていないと言った。私は、その意味を知りたい」

少女は走り出す。シンを探し、その答えを見つげるために。

どうして、こう面倒ごとに巻き込まれるのだろうか？

赤い髪のレイピア少女がいなくなったのを見計らってフィーの部屋を見上げる。

「ああ、俺って女難の相があるんじゃないか？ それも、死相と隣り合わせの」

ため息が溢れる。

確か、授業受けなくてもいいんだよな。というか受けたところで意味はないし、呼び出されるまで黙ってるか。

契約を結んだことによって、魔力がなくなるとも一方的にフィーに召喚される。

まるで、呪いだ。

「あと、見てるだけなら。話し相手になってくれよイルフ」  
初めてあつたときと同じ出現。

虚空から現れたイルフは不気味なほどににこやかだ。

「シン様。私にお気付かれになったのでしたら、お嬢様のところに顔を出すようにとのことですよ」

「お嬢様？ ああ、あのマキナのことか。ほんと、運が悪い」

洪々と屋敷に向かう。

いつ見てもやけに豪華な屋敷。学園長の家だからといっても、ここまでくると腹立たしい。

屋敷の中に入り、応接間に行くと、既にマキナが座っていた。

「遅かったね」

「寝心地が最悪だったからな」

「じゃあ、高級なベットにするかい？」

「永眠してやる」

たわいもない話をするが、マキナはどこか切羽詰まったような様子だ。

「なにかあったのか？」

「ん？ ああ、わかるかい？ ちょっと、まずいことになった」

「まずいことだと？」

いつも余裕のある表情が似合わず無表情になる。

「この世界にも神を狩るもの・・・要するに、君と似たようなことをする連中がどうやらここを標的にしたらしくてね」

「だからどうした？」

「その程度では驚かないんだよね。詳しく言うと、昨日君が戦った

様なレベルよりも上の奴らが二十人。あとは、ありとあらゆる異能者を殺すやつが一人。こいつがとてまやつかいでね、どうやらそいつの使い魔は一つの国を跡形もなく吹き飛ばすのが得意らしい」

「そりゃ・・・やばいな」

「ヤバイだろ？」

シンはイルフに視線を向ける。

「イルフ・・・あんならどれだけやれる？」

「・・・雑魚二十人はお任せください」

「イルフ。雑魚とは・・・君もなかなか言うじゃないか」

「光栄です。お嬢様のお望みとあれば、私が一掃しますが？」

「・・・ダメだよ。雑魚はともかく、もう一人はシンと同じくこの世界の住人ではない」

その言葉にシンは驚愕する。

「なにっ！？ 俺以外にもいるのか？」

「・・・いるよ。どれも、ありとあらゆる世界での英雄や王とあがめられる存在だ。こちらとしても、あまり世界に干渉してもらっては困る」

「そいつは、破壊力だけか？」



「いや。情報によると・・・始めに結界を張るらしい。それも、空間を固定し僕たちの神としての力や召喚へ干渉する物だ」

「結界だと？」

「ああ、見てみるかい？ 一部持ち帰ったサンプルがある」

用意周到にイルフが一つの箱を持ってきた。

「これだよ」

開かれた箱に入っていたのは一枚の紙。

「バカなっ！？ この結界は陰陽道の呪符をベースとしている」

「・・・やっぱりか。黒幕がいるってことだよ。ここを標的にしている奴らには」

「だから、イルフは動かさないのか？」

「ああ、これでもイルフは腕が立つからね。消えてもらっては困るんだ」

イルフはその言葉に頭を下げる。たいした忠義だ。

「それで、俺は何をすればいい？」

「話が早くて助かるよ。君にはこの手の知識があるんだろ？ それを見込んで先手を打ちたい。奴らもバカじゃないから内通者の一人

でも送り込んでいるだろう」

「だろうな。このタイミングで学園というオープンなところなら方法はいくらかもある。ましてや、入学式後になれば・・・一年か？」

「そうかもね。後、考えられるのは、そちらに目を奪わせて・・・二年三年とかかな？」

「教師はどうなんだ？」

マキナが渋い顔をする。

「嫌なところをつくね・・・確率は低いと思うよ。僕が目利きして引き抜いた人ばかりだから」

シンは立ち上がり、応接間の扉に向かう。

「ホントにシンは僕との会話が嫌いみたいだね」

「ああ」

マキナに素っ気ない態度。シンは足を止めることなく屋敷を後にした。

## 開校と友（後書き）

腕を上げていければな

よ願いつつ、話を書きます！

頑張ります！

目標、「簡潔、間欠、完結」ですw

## 生活の普遍。

私は、とても孤独だ。

学園での教室。見知らぬ人間は接し方がわからない。それが、いままで一人で生きてきた報いだと思うと、中途半端に出会ったシンが妙に心に訴えかける。

それは、「一人じゃない」という無責任にもほどがある言葉。殴りたい。

「そばにいないのに」

ぼつりとつぶやいて、座る後列の一番後ろの席は周囲がどこか寂しい。

剣見の儀式での一件がひどく作用しているのは目に見えている。

倒した三年のミリアの学園での異名は「高潔ノーブル・ティルなる悪魔」。いわゆる天才の部類に入る。そして、その人の使い魔をあかも一瞬で片づけてしまったシンは、おそらく魔王と言ったところではないだろうか？

ただでさえ、人と関わることが不得手な私。それが、恐れの対象となれば・・・孤独は目に見えている。

フィーは今すぐにも教室から逃げだしたいという思いが、ピークに達して席を立とうとした瞬間、教室に教師らしき白衣の眼鏡を

掛けたヒヨロヒヨロな男性が入ってきた。

最悪のタイミングっ！

「ひっ」

フィーの怒りと殺意のこもった睨みはその男性教師を恐怖させた。

それを見た他の生徒も怯えだし・・・フィーは戸惑いながら机に俯せる。

「そ、それじゃあ、席についてください」

男性教師は冷静に対処し、HRを始める。

「始めに、私はオレリガ・ハーマス。変な名だと自分でも思うから、ハーマスを優先して呼んでもらいたい。今日から君たちの担任となるが、担任になったは今回が初めて。私としてもすべてを把握できるかは怪しい・・・だから、副担任を用意した！ 情けない話ではあるが、そっちを担当だと思ってもらえると色々助かる」

そう言うと、ハーマスと名乗る教師が教室の入り口を指さす。

「・・・・・・・・・・」

教室に沈黙が訪れた。

「あれ？ オルガ先生、いないんですか？」

おかしいと思ったハーマス先生が入り口に向かうと・・・いきな

り教室に乗り込んできた女性に飛ばされて、教室の端にたたきつけられた。

「やあやあ、生徒諸君！ 私が副担のオルガ・ミセスだー。ミセスだからって女だからなっ！」

大口で笑う女性教師はスタイルこそ素晴らしいが……どこか付いていけない危なさを醸し出す。

現に、ハーマス先生は気を失って教室の端に倒れている。

「あれ？ ハマちゃんは？」

おそらくハーマス先生のことだろうと大半の生徒が悟り、教室を見渡すオルガ先生の視界にその空しい姿が晒される。

「あー。またかー。私が入るといつもああやって倒れてる変な先生がハマちゃんな」

生徒はみんなオルガ先生を見て、視線で「あんたの方が変だ！」と訴える。ただ……一人を除いて。

「……一人だけ私に向ける視線がおかしいんだけど」

オルガ先生がいうおかしな視線をたどると、そこにはフィーがいる。

興奮して、立ち上がったフィーはオルガ先生に駆け寄り……。

「お会いできて光栄です！ オルガ・ミセス先生！」



フィーのクラスは一年Gクラスは、ほとんどが平民の出だ。身分の差があるとはいえ、隔離されるのはおかしいという意見もあるが、金が絡むと弱いのが公共である。

だが、私はは少しだけその制度に感謝したいと思う。

遠目に見ていたシンは一言。

「マキナ・・・お前このクラス・・・仕組んだろ」

どこからどう見ても、ノリがいい。

そして何より、このクラスの生徒はどれも宝石の原石。

「原石を磨くには・・・フィーは荒すぎるぞ。こいつらが、耐えられると？・・・マキナもフィーというおもしろさに目をつけたというところか」

シンはその風景を見て、自分もあの中に加わりたと思った。

だってそこには、シンが望んでいた友や仲間・・・それが有ると錯覚させる「楽しさ」があったから。

「救われたのは俺の方が」

シンはいつもの湖に歩き出す。



そこに映るのは自分。だが、予想を裏切る表情。

「俺、笑顔だろ？　なんで・・・泣いてるんだよ」

認めたくなく、シンは足で近くにあつた石を蹴り、水面に波紋を描く。

「あーあ。この湖は僕のお気に入りなんだから、あまり汚さないでくれよ」

最も合いたくない奴・・・マキナの出現。イルフと違い、神と名乗るだけあつて気配が読めなかった。

「なんだよ。笑いにでも来たか？」

表情を見せまいと、マキナに背を向けたまま不機嫌そうに言葉を返す。

「君が僕を嫌って逃げてしまうから。ただ、逃げ道を封じに来ただけだよ」

確かに逃げられない。

「なにか要か？」

「ああ。君にはGクラスに入ってもらおうかと思ってね」

「盗み見とはいい趣味だな」

「気にしなくても、『決まっていたことだ』」

そうかい。そうやって気づかないうちに自分の流れに乗せるのか。

「やめる。人の心にまで作用するようだが、俺には効かない」

「不思議だね。君は感情を持ち合わせておらず、あらゆる現象をそ目で悟っている。僕と同じ。なのに、どうしてそんなにも僕より人間らしいのか。それが知りたい」

「・・・みんな俺の中に答えがあると思うみたいだが、それは違う」

まだ赤いであろう目元のまま振り返り、マキナの目を見つめる。

「不完全すぎるんだよ。俺が・・・」

「フツ、不完全とはあらゆる意味で完全なんだよ。まあ、この言葉は好きな人の受け売りだけだね」

「そうかよ。でもまあ、その好意に甘えるかもしれない。借りばかりが積もるな」

「神様は見返りを求めない。なぜなら、神は人にチャンスだけを与えるからだよ」

「それも好きな人の受け売りか？」

「いや、僕の人生だよ」

少し、ほんの少しだけど、シンはマキナを話し相手程度には認め

ようと思った。

生活の普遍。(後書き)

中持ほしい。

アイデアが・・・ない！

テキトーな異能とか使い魔とかのアイデアが圧倒的に足りない。

誰かちょうだい〜よう

神様〜文学の神様〜

あつ！ 薪担いで立ち読みしてるあれだよな？

## 授業と怠慢

まぶしい太陽が現実味を帯び、確かな足取りでそこへ向かい、ドアの前で停止する。

「緊張しているのかい？」

ハーマス先生が眼鏡を中指で上げ、にこやかな表情で言う。

「いえ。どちらかというと・・・命の危険が」

「そうかそうか。これで私も楽に・・・じゃなくて、楽しくなると思うよ」

正直な人だと安心しつつ、教室に入る。

「みんなに今日から・・・まあ、知っているとは思いますが、仲間を紹介する」

スツと前に出て、渾身の笑顔で教室にいる生徒を見渡す。

「初めまして。シンです、今日からヨロシクお願いします」

見知った顔もある。

たとえば、殺気に身を任せて今にも殴りかかってきそうなフィー！。

女子寮で悲鳴を上げられた青髪の少女。

そして、先日の赤い髪に黒い瞳のレイピア少女だ。

「じゃあ席は」

ハーマス先生が口にした瞬間。フィーの席の周りーマスが虚空と化していた。

「……好きな所に座りなさい」

ああ。後ろから殺意を向けられながら授業という拷問を受けるか。あるいは、隣の席に座って度々殴られると云う極刑を受けるか。もしくは、後ろで……。

ダン！ フィーはよほど後ろに誰かがいる状況が気に入らないらしく、さりげなく置かれた後ろの席を机ではなくした。お前はゴルゴかっ！

まだ死にたくはないし、殺意程度ならまだいい。

あからさまに嫌な表情で「前で」といい、その希望の席に着くと、隣から声を掛けられる。

「シン様……」

耳を疑う。そこにいるのは赤い髪の少女で、目を輝かせている。

「はい？」

「お願いします。私を弟子にしてください！」

何言つてやがる？ 俺に弟子？ まてまて。俺何処でそんな……  
どこで間違えたっ！？」

驚いたのは俺だけではなく、周りの生徒、教師、フィーまでもが  
呆気にとられた。

「ちょっと！ 私の使い魔に何言ってるのよ！」

以外にもその声を上げたのはフィーで、俺は赤い髪の少女とフィー  
を対局する様を特等席で見る羽目になる。

「何ですか貴方？ 私にはあなたがこの人と釣り合うとは思えない。  
私は認めませんので」

「何をいつてるの？ 私がシンと契約した様を見ていたのでしょう。  
だったら潔く認めなさい！」

「ええ、ええ、それが何か？ 貴方、どうして人同士での契約が忘  
れられたか知ってる？」

「愚問ね。人とは他と相容れぬもの。裏切りが多く、それゆえに今  
は契約召喚が一般化してる。私たちもいつか裏切ると？」

「そうでしょうね。だって貴方、人と付き合うの、苦手でしょう？」

「うっ。……それは認めるわ。でも、だから調教してるのよ！ シ  
ンは犬よ！」

おい待て。さらっとカミングアウトしなかったか？ 俺は犬だと  
？ 調教？ 契約破棄したいんですが、そりゃもう今すぐ！

フィーに視線を向けると「何か？」と強い視線を向けられ、しづしづその思想を捨てるに至る。

「最低です！ 人を何だと思ってるんですか。シン様、わ、私の生贄になりませんか？」

「……ご、五十歩百歩だ！」

「「どつちが百歩？」」

「そこで争うなっ！ 俺は、シンだ！ 誰の物でもねーー」

「ふふ。そうよね、シンだって私のものだって言ってるじゃない！」

「話聞いてたっ！？ ご都合主義にもほどあるし！」

「ありがとうございます。今から師匠と呼びますね！」

「君も同格だよっ！？ なんで俺の選択肢にはバットエンドしかないの！？」

笑いながら睨みあう二人に疲れ、静かに席に座ると、「はいはい。そこまでね」手をたたきながら入ってくるスミス先生が二人をなだめる。

す、凄い。あの二人を止め……。うん。赤い髪の子はともかく、フィーの拳も顔面で止めてるとこも同じくらい凄い。

「あははは。イタイ。お願い。敬う気持ちがあるなら拳を抑えてく



れないかフィーリア・アルファイム君」

「どうやらお約束というやつになりつつある。いまだにスミス先生がどれほど有名なかは分からないが、フィーの反応を見る限りそれなりに凄いのだろう。」

「じゃあ、始めようか。HRに引き続き授業をさせていただきます」

「おい！ ハーマスっ！ 私を見捨てるな」

「では」

フィーとスミス先生がじゃれている。……微笑ましいな。そうして、そこだけ忘れられた空間として皆が暗黙の領域と化し、ハーマス先生が悠長に授業を進める。

授業は終わり、フィーはいつの間にか席に座りニコニコと機嫌が良さそうで、肝心のスミス先生は……「し、死んでしまっ」とうめきながらも教室から立ち去る。当然、教室には顔を出さないだろう。

「なあ、フィー。スミス先生ってそんなにすごいのか？」

表情が一変し、「はああ？」といかにも蔑んだ瞳と表情で圧倒された。

「スミス先生といえば、かの有名な魔剣や天剣を生成することのできる唯一無二の力を持ち、七賢人しちけんじんの次に権力を持つ、取っても凄い人なの。わかる？」

「……何となく。七賢人って何？」

「ああ、そこからの？ 七賢人とは」

「七賢人。それはこの世界で最も強いといわれる七人の賢者。その権力は国王を遥かに超えます。それゆえに国に属さず、世界に属す英雄とも言える存在ですよ。わかりましたか師匠？」

「フィーの解説を横から掻つ攫い、赤い髪の少女がほとんど零距离に近づき解説してくれた。」

「あんだ、なんでそこまで私の邪魔するのよっ！」

「はい？ 貴方に用はありません。師匠さえいてくれればいいので」

「ふん。どうせシンは貴方の名前すら覚えてないわよ」

「ふつ。あなたバカなのですか？ 私が師匠にまだ名乗っていないのに知ってるわけないじゃないですか？」

「また更に喧嘩が始まる。……あれ？ そう言えば、この赤い髪の少女、始めてであつたときと性格が違うような……。」

「あっ、失礼でした。師匠、私の名前はリリーナ・ヴァルシュタンです。リリーとお呼びください！ 初見の時は、失礼いたしました。でも、どちらか私なので。よろしく願いいたします」

「どちらも？」

そう。改めて彼女を「目」で見ると、明らかに違う。始めてみた少女からは「美」が感じられ、今目の前の少女からは「死」が感じられた。

「リリーか。ああ、よろしくっ!? ウガっ!」

リリーに微笑みかけた瞬間、フィーの鉄拳が顔面に入り、教室の隅に飛ばされた。

「な、なにしてんのよ! シン! こんなのと仲良くなんならないでよね!」

「こんなのって、師匠にひどい事しないでくださいよ」

「なに? あんたもしかしてシンに惚れてるの?」

「ええ。そうですよ!」

開き直ったリリーの態度と思いがけない告白にフィーは戸惑うが、教室の隅で気を失っているシンには届かない。

「ほ、ホントに? ……わ、私だって。す、好きよ」

「え!? 私は師匠の腕に惚れたって意味なんですか?」

「なっ!?!」

にやにやと笑うリリーにフィーはとうとう拳を振るうが……その拳はリリーにかわされ、そのベクトルを利用して、フィーはシンの倒れてる所に投げ飛ばされる。

宙を舞い、ありえないとばかりに思考停止したフィーは頭から床に落ちるところを、起き上がったシンが受け止める。

「おいおい。弟子として認めてやるから、あまりフィーを気づけないでくれよ。これでも俺の命に代えてでも守るべき奴なんだから」

「……羨ましいですね。では、師匠。私は撤収しますね」

嵐のように過ぎ去った。フィーは顔を少し赤くしつつも、シンに支えられて地面に足を付ける。

「ありがとう」

それだけ言うと、フィーは席についてふさぎこむ。

おかしいやつ。あと、もう一人に礼を言わなくちゃな。

「ありがとうな」

近くにいた青い髪の少女に言う。「えっ？」と顔を向けるが、笑顔で返した。

「……分かりましたか？」

「ああ、落ちる瞬間とフィーの拳も衝撃和らげてくれただろ？」

「はい」

無口な少女。恐らくは、空間に作用し、大気を操った……ように

見えたが、かなりコントロールがいいのか弱く力を使っていたのか、よくは見えなかった。

「よろしく」

青い髪の少女はコクンと頷き、そのまま席につくと同時に教師が入ってきた。

名前を聞き忘れた。……時間はまだあるかな。いろんな意味で。

「始めますよ！」

教師の声に促され、席に座るが、隣の席のリリーは昼食まで帰ってこなかった。

授業と怠慢（後書き）

すんごく空きマスタ！

少し、挫折気味W

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6633y/>

---

Velcelck ~ベルセルク~

2011年12月9日01時50分発行